

## エゼキエル書1章28節 「主の栄光と臨在」

### 1A ノアの時代

1B 神の御霊の争い

2B 水の裁き

3B 神の契約

### 2A 神殿の栄光

1B 主との出会い

2B イ・カボテ

3B ここにおられる主

### 3A 御父の栄光

1B 御子にある栄光

2B 宮清め

3B 聖霊の注ぎ

## 本文

私たちの聖書通読の学びが、エゼキエル書に入ります。午後礼拝において、1章から3章までを読みたいと思いますが、今朝は1章28節に注目したいと思います。「**その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。**」

私たちはこれまで、エレミヤ書また哀歌を読んでいきましたが、エゼキエル書の時代背景は似ています。時は、「エホヤキン王が捕囚となって連れて行かれてから五年目であった」と1章2節にあります。バビロンへの第二次捕囚があつてから五年目のことです。紀元前592年辺りのことです。つまり、568年のエルサレム破壊に近づいている時に主はエゼキエルにご自分の言葉を与えられました。けれども、場所が違います。エレミヤはエルサレムに留まって、エルサレムが破壊される時までずっと預言していましたが、エゼキエルは、そのエホヤキムたちが捕え移される時にいっしょに捕囚の民の中において、捕え移されてきました。彼はエレミヤと同じ祭司出身です。そして、今、彼はバビロンにあつて、捕囚の民ユダヤ人たちが住む共同体のところにいました。その時に、主の栄光を見ます。

エゼキエルはおそらくこの時に、三十歳であつたであろうと思われ（1:1）。律法によれば、その時にレビ人は奉仕を始めます（民数4:3等）。エルサレムから、神殿から遠く引き離されたエゼキエルです。おそらく、非常な孤独感を味わっていたことでしょう。エルサレムから引き抜かれたことに痛みを感じていたことでしょう。けれども、主の天幕で奉仕をすることのできる年齢に達した時に、主はそのバビロンの地で、まさにそこを神殿の栄光で臨んでくださいました。四つの生き物のような存在がやって来ましたが、それはエデンの園にもいた御使い、ケルビムです。そして、幕屋や神殿において、

主がお会いするところである至聖所で、純金の贖いの蓋に彫られているケルビムです。黙示録では、主の御座のところには四つの生き物があり、主を絶え間なく礼拝し、賛美を捧げ、天にいる全ての存在の礼拝を導いている天使長です。そして、その上に玉座がありました。主なる神ご自身の御座です。

そして1章28節のことばになります。「**その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。**」これは、ノアの時代、洪水の後に主が契約を結ばれた時の姿のようでもあります。主がご自分の栄光を、離散の地バビロンで現わしてくださいました。

引き離されているその只中に本来の姿があった、という経験はよくあります。私たちが聖地旅行に行ったとき、その日本人ガイドの方の日本語がとても丁寧で、聞いていてうっとりさせられるものでした。私たちの日本語には失われてしまっている敬語をたくさん使っておられます。彼女は、イスラエル在住30年以上経っているのですが、むしろ日本から引き離されていたからこそ、今の日本語の乱れの影響を受けていませんね。古代の中国を見たいと思ったら、中国大陸に行くのではなく実は、日本の建築、現代の中国に行っても伝統ある古代を見つけるのは難しいとしばしば言われますね。けれども実は、古代の中国が平安京にあります。唐の時代の首都を模倣したものです。言葉も、同じ漢字語ですが日本語や韓国語、また中国の中にある方言の中にむしろ、古代に使われていた中国語の名残があったりします。

引き離されている中で、実は自分がその只中にいたという経験は、結婚生活です。独身の時に楽しんでいた友との時間が結婚後に無くなってしまい、淋しくて仕方ありませんでした。若くして結婚したので、これで独身の時の楽しみは終わったのか、と嘆いてしまったことがあります。ところが、実は自分の心は気づかぬうちに変わっていました。妻と一緒にいる時が、実は友との時間、いやそれ以上のものであることに気づきました。そして、教会の青年会に出ても、もはや自分は他の独身の人たちのように楽しめなかったことに気づいたのです。

実は、これがエゼキエルに身に起こっていたことです。彼はエルサレムから引き離され、痛みを覚え、悲しんでいたと思いますが、実は、エルサレムの神殿は偶像でいっぱいになっていました。そして主の栄光がそこから去ろうとしていたのです。自分が引き離されていたと思っていたところに主の栄光の臨在があり、主がおられるだろうと思っていたところでは、主の栄光が去ろうとしていました。

## 1A ノアの時代

### 1B 神の御霊の争い

主がこれからエルサレムに対して、ご自分の怒りを下される時に、その言葉をエゼキエルに与える時に、「**雨の日の雲の間にある虹のよう**」に現れましたが、いま言いましたように、それはノアの時代の洪水の後のようでした(創世記9:13-17)。主が雲をおこし、その時に虹が現れますが、その虹が、ノアや動物と結んだ契約の印であり、その虹を見たら、大水は大洪水とはならないと約束されます。

ノアの時代のことを思い出してください。この時に主は、人々の悪のゆえに、ご自分の霊が彼らには長くはとどまらないであろうということを言われました。「創世 6:3 そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう。」と仰せられた。」とあります。ここで主が仰っているのは、おそらくは、ご自分が霊によって、彼らの良心に訴えかけているのは永久には続かないということです。ヘブル語では、「留まる」という言葉は「争う」というように訳すこともできます。つまり、彼らが心で悪を計り、悪いことだけを行なっているのですが、それをご自分の御霊で、「それはいけないのだ。」と No!と言われて、警告を与えてくださる働きはいつまでも続かないんだよ、ということです。

主は、私たち人間の良心に聖霊によって、歯止めをかけるようにして働きかけられます。罪を犯し、悪を行なっている時に、それをやってはいけないという思いを与えることによって、心に葛藤を与えてくださいます。その痛みによって、その人が主の前に出て行って、罪を告白し、悔い改めるように導いてくださいます。けれども、もしその聖霊の働きを拒んでいくのであれば、どうなるのでしょうか？主は聖霊による、良心に働きかけることをやめ、その欲望のままに引き渡されるのです。そして、その罪によってもたらされる結果をその人が刈り取るままにされます。それが、神の裁きであります。ノアの時代、人々がノアの説教を聞いて、悔い改めることのできる長い期間がありました。けれども、彼らはその言葉を信じませんでした。それゆえ、洪水によってその水によって滅んでしまいました。

したがって、聖霊の働きは、この世がこれ以上、悪くならないように引き留める働きをしています。私たちの心のうちに働かれます。そして主は、ご自分の言葉をもって、聖い御霊によって、私たちに過ちを明らかにして、私たちの心に待ったをかけてくださり、葛藤を与えてくださるのです。私たちの心が、良心で痛んでいる時に、自分は果たしてキリスト者なのか？と疑ってしまうようなことがある時に、安心してください。その惨めな思いはむしろ、主の聖霊がおられる証拠であります。そして、「私は、そうした心の葛藤が、戦いがないです。」と言って、神の言葉で罪であると断じられていることを行なっているのであれば、もしかしたら御霊がおられないのかもしれないかもしれません。その時に待っているのは、神の裁きなのです。

## 2B 裁きの後の契約

そして、虹によって現れた主の栄光は、もはや大洪水によって地上を滅ぼすことはすまい、という神の誓いの現われでありました。水によって裁いたけれども、主はもはやそれはしない、とお決めになりました。エゼキエルに対して、主は同じ姿で現れたということはどういうことなのでしょう？それは、「わたしは、これからエルサレムを裁く。そこにある宮を壊し、そこで人々は剣で倒れ、疫病と飢えで死に、残りの者たちはバビロンに捕え移す。しかし、わたしの怒りはそこで満ちる。わたしは、その後、決して裁きを行わない。」という誓いなのです。エゼキエル 33 章において、エルサレムが破壊されたことをバビロンにいるエゼキエルに、伝える者がいました。その言葉を聞いたら、エゼキエルは口を開き、預言を語り始めました。それ以後の預言は、エルサレムをどんなことをしても回復させ、イスラエルの地を回復させ、民を御霊によって新しくするという決意でありました。主は、ご自分の怒り

を現わしたのだから、もはや怒りは残されておらず、恵みの御霊を降り注ぐと約束されたのです。

これが新しい契約の内容です。主は、ご自分の怒りを御子に注いでくださいました。それゆえに、この方に信頼を置く者は、罪に定められることなく、義と認められるのです(ローマ 3:25-26)。ですから、私たちはキリストの罪の供え物を受け入れて、この方を信じて受け入れる時に、その大いなる主の栄光を仰ぎ見ることができるのです。「ローマ 5:1-2 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。」

## **2A 神殿の栄光**

### **1B 主との出会い**

ところで、神の宮というのはどのような存在なのでしょう？ 私たちの信じている神は、天地を創造された方であり、あらゆるところに満ちておられる方です。どこに行っても、主はそこにおられます。主の臨在から私たちが離れることはできません。神殿を建てたソロモンは、「それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたを老いれすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。(1列王 8:27)」と言いました。では、何のためか？ 主は、「わたしの名をそこに置く。」と言われました(29 節)。聖書で、名前というのは、その人の正体、本当のところを表します。ですから、神の本質、神がどのような方であるのか、神のすばらしさ、その重みを表していることになります。

主は天の天よりも大きい方、宇宙でさえも、この方を収めることはできない方です。しかし、その方に会うことができているかと言えば、そうではありません。例えば、国王のいる国では国の至るところに、その写真が掲げられています。タイのレストランに行けば、国王と王妃の写真が掲げられていますね。けれども、王宮に行き、その王座の前に出て、謁見するのは大違いです。それと、主の宮に入ることは同じです。主がモーセに対して、主の幕屋についてそれを造るように命じられました。至聖所に安置される、契約の箱、そして、その上に置かれる贖いの蓋について教えました。そして言われます。「出エジプト 25:22 わたしはそこであなたと会見し、その『贖いのふた』の上から、すなわちあかしの箱の上の二つのケルビムの間から、イスラエル人について、あなたに命じることをことごとくあなたに語ろう。」主がケルビムの間で、会ってくださいます。そしてそこから語ってくださいます。今、エゼキエルはケルビムを見ました。その上に座しておられる主ご自身を見ました。その栄光を仰ぎ見た時に、主がエゼキエルに語られました。

ところで、主はエゼキエルにご自分の言葉を語る務めを与えられます。私たちは、主の言葉を語りたいと願うのであれば、人々に福音をもって証したいと願うのであれば、初めにしなければいけないことは礼拝です。主を礼拝した者にこそ、主はご自分の言葉をその人に与え、そして語り継ぐようにされます。

## 2B イ・カボテ

エゼキエルの預言は、8-10 章が大きな分岐点となります。そこには、エルサレムの神殿で、人々が忌み嫌うべき偶像礼拝をしていることを主が、エゼキエルに見せている部分になります。聖なる神が住まわれるところで、なんと忌まわしい偶像、肉の欲をむき出しにするようなことを行なっていたのです。それはつまり、「外では敬虔を装いながら、その実を否定している。」ということです。口では神を敬っていますが、心が遠く神から離れています。それらを行なっているのは、ただ人から言われているからです。そして甚だしきは、敬虔を利得の手段や欲望の手段に用いたりします。

そのように、外では主を礼拝していながら、内では忌まわしいことを思い、また隠れたところで暗闇の業を行なっているので、主がそこにはご臨在できないようになります。ケルビムの上にある主の栄光と臨在が少しずつ、神殿から離れていく幻をエゼキエルは見ました。神殿から東の門へ、東の門から東にあるオリブ山へ、そしてそこから栄光が消えました。そして、バビロンによって包囲を受け、神殿は破壊されたのです。

実は、これは初めてのことでありませんでした。かつて、士師の時代の最後に、サムエルが生まれました。エリという祭司がいました。その息子、ホフニとピネハスはよこしまな者でした。幕屋の入り口で仕えている女と寝ていました。そして、なんと主に捧げるべき火によるいけにえを、彼らは民から奪い取って、その脂肪のついた肉の最上の部分を自分たちで食べたのです。脂肪は焼かなければいけないという戒めがあったのに、彼らは侮って自分たちで食べたのです。主への礼拝を、自分の利得や欲望の手段にしたのです。それでペリシテ人が攻めてきた時、人々は神の箱を戦場に持っていくことにしました。それで勝利が与えられると思ったのですが、かえって負けてしまい、神の箱は奪われました。ホフニとピネハスも戦死しました。ピネハスの妻は身ごもっていましたが、出産の時に死んでしまいました。彼女は死ぬ直前に、その息子の名を、「イ・カボテ」と名付けました。カボトというのが栄光という意味ですが、「栄光がイスラエルから去った。」と意味でした。

主は、いつまでも共にいる方ではありません。殊更に罪を犯し続けるならば、その栄光を去らせることになるのです。イエス様は、「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。(マタイ 5:8)」と言われましたが、汚れた心には主の栄光が去るのです。

## 3B ここにおられる主

しかし、主は決してご自分の民をあきらめられません。主は、その裁きにおいてご自分が主であることを明らかにされます。そのことによって、残された者たち、バビロンに来た者たちの中に、このことを行なったのは主ご自身であったことを知る者たちが出てきます。そして主は、イスラエルの民を約束の地に戻し、後の日に御霊を注がれます。その時に彼らは確かに主が神であられることを知り、これまでやって来たことを恥じるようになります。もうやってはいけないのだと分かります。そして主は、イスラエルに神殿を回復させます。ソロモンの神殿よりも大きな神殿です。40 章以降に書いてあります。そして 43 章には、かつて去っていった主の栄光が東のほうから入っていくのを見ます。神殿の

中に戻るのを見るのです。そして最後、エゼキエル書の最後に、主が最も行われたかったことを行なわれます。「その日からこの町の名は、『主はここにおられる。』と呼ばれる。(48:35)」

### 3A 御父の栄光

これは、私たちの主イエス・キリストが地上に戻られて、神の国を建てられた時に実現します。しかし主は、既に教会にご自分の栄光を住まわせることをお決めになりました。

#### 1B 御子にある栄光

まず神が私たちの御子をお与えになったことの時を思い出してください。「ヨハネ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」神が肉体を取って現れた時に、私たちの間に神が住まわれました。イエス様がおられたことにより、そこに神の栄光の幕屋が張られました。主を見れば、父の栄光を見ることができるようになったのです。

ですから、イエス様がお生まれになる時に、天からの栄光が輝いたのです。「ルカ2:8-14さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」」ちょうどこれは、エゼキエルがバビロンにおいて、主の栄光の輝きを見た時と同じようでありました。

#### 2B 宮清め

そして主は、エゼキエルの預言を実現しようとするかのように、オリーブ山からエルサレムに入られました。宮に入られた時に、おそらくは東の門から入られたことでしょう。ところが、そこで行われていたのは、商売でした。しかも、不正に基づく商売でした。それで、主は両替人の台をひっくり返し、商売をしている者たちを追い出されました。そして主はその指導者らによって十字架刑に処せられました。しかし、墓から甦られます。そして天に昇られますが、その場所はオリーブ山でした。主の栄光は同じように、オリーブ山から去っていったのです。主は今、神の右の座におられますが、それまでの間、エルサレムに栄光が戻ることはありません。

#### 3B 聖霊の注ぎ

しかし主は、「もうひとりの助け主を遣わす」と約束されました。聖霊の約束です。そして主は、ご自分が去った後に、聖霊を遣わし、信者たちの間に住むことを約束されたのです。今や、イエスの御名

によって集まるところに主がおられます。「1コリント 3:16 あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。」ですから、私たちのところに、主はご自分の名を置かれます。イエスが、ここで会ってくださいます。そして、ご自身の栄光を見せてくださいます。そして、ご自分の言葉を語ってくださいます。私たちは今、エゼキエルがかつて味わった主の栄光を、聖霊によって見せて、私たちを強めてくださるのです。「エペソ 3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。」

したがって、私たちは、エゼキエルと同じように主の栄光のご臨在を楽しむことが許されているし、またエルサレムの神殿のように、神から同じ警告を受けています。主は、聖霊によって私たちと交わりをしたいと願われています。しかし、私たちが肉の欲を満たすのであれば、聖霊の宮であるこの体で、偶像礼拝の罪と同じことを行なってしまうのです。「1コリント 6:18-20 不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」

もう一つ、私たちに与えられている警告は、「黙示 2:4-5 初めの愛から離れること」です。「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」この燭台とは、主イエスご自身がおられること、臨在していることです。それを取り外すということは、主のおられない教会となる、ということです。これは厳粛な警告ですね。私たちが、形だけは礼拝は守っていく。正しいことは信じている。けれども、初めの愛、罪から救われたことの喜び、その恵みの中に生きていないのであれば、神の愛が留まっておらず、ゆえに兄弟への愛も実践していないのであれば、主はご臨在を取り上げると言われます。

私たちが主への愛の前に何か、置いていないでしょうか？ 自分の楽しみを置いていませんか？ 自分の都合を置いていませんか？ 主が自分にとって神となっていますか？ この方への愛、情熱、それ以外の何かに夢中になっていませんか？ 初めの愛から離れていないかどうか、確かめてみましょう。そして罪を犯しているなら、それを放置していたなら、聖霊が教えてくださっている間に告白して、捨てましょう。